

聖書：ピリピ人への手紙 1章 12～26節

説教題：生きること、死ぬこと

1 パウロの心

1) 「安心してください」

ピリピの教会は、自分たちに福音を伝え、育ててくれたパウロがローマで投獄されていることを聞き、テモテとエパフロデトのふたりをパウロのもとに送り出します。彼らが戻ってきたら、ふたりからパウロの様子を詳しく聞きたいとも願っていました。そこでパウロは手紙に書き、自分のことを詳しく伝えることにします。

皆さんがパウロであったなら、どんな風なことを書いたでしょうか。事実をそのまま書くでしょうか。私は、高校を卒業した後親元を離れて札幌に来ました。頻繁にはありませんでしたが、ときどき実家に手紙を書いたことを思い出します。親にあまり心配をかけないようにと、いろいろなことが実際あっても、「こちらは大丈夫だから」と書いた記憶があります。

実はパウロも同じことをしています。12節で「私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。」「私の身に起こったこと」とは、投獄されていることです。「私は大丈夫です。自分が投獄されたことでかえって福音が前進しているのですよ。」ピリピの人たちに心配をかけまいとして、こんな表現をしています。でも、パウロの本心はどうであったのか。そして、何を見ようとしていたのか。今日はそこに焦点を当てて考えていきます。

2) ねたみや争いに巻き込まれる

パウロはもちろん嘘を書いたわけではありません。福音が前進しているのは事実でした。ローマ軍の親衛隊でさえ自分がキリストのゆえに投獄されているのを聞きました。親衛隊とは兵士の中でもすぐれた素質と忠誠心を持っている言わば軍隊の中のエリートです。そんな人たちにも福音を伝える道が開かれました。

そればかりではありません。ローマにいるクリスチャンたちが、パウロの投獄をきっかけに、大胆に主を証しするようになりました。大きく分けて二つのグループがありました。ひとつは、愛をもってキリストを伝える人たちで、パウロの仲間たちです。いっぽう、これとは反対にねたみや争いをもってキリストを伝える人たちもいました。

パウロにねたみを持つ人たちもいたと聞き、驚いたかもしれません。おそらくこういうことだったのでしょう。パウロは自分が投獄されたことで、ローマの非常に高い身分の人たちと接触する機会が与えられました。おかげで親衛隊にまで影響力を及ぼすことができました。もともとローマに住んでいたクリスチャンたちにできなかったことを、よそからやって来た男が簡単にやってしまったのです。それでプライドがひどく傷つけられたように感じた人たちがいました。そんな人たちが、パウロに対抗心を燃やし、キリストを伝えようとしていたということのようで

す。

3) 「喜んでいます」

これにはパウロも大変困りました。そもそもパウロは進んでローマに来たのではありません。彼がまだエルサレムにいたとき、パウロに反感を抱く人々が大騒ぎを起し、それでローマ軍に逮捕されたのが発端です。パウロはローマ市民権を持っていたのでローマで裁判を受ける権利があると主張します。それでローマに送られてきたのです。最初からすばらしい福音伝道計画があつて、パウロがそれを成功させたという話ではないのです。まったく考えもしていなかったことが次から次へと起きて、気がついたらローマの高い身分の人たちに福音が宣べ伝えられていた。その結果、パウロはねたまれてしまった。パウロでなくとも、どうしてもと言いたくなるでしょう。「投獄されている私をさらに苦しめています」と書く気持ちがよくわかります。

ところが18節になるとこんな書き方になります。「すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであつて、このことを私は喜んでます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。」

つい先ほどまでは、苦しんでいると訴えていたのに、ここでは一転して「喜んでいます」となります。これはどういうことでしょうか。普通こんなことがすぐに言えるでしょうか。なにか無理をしているように私には感じます。心の中では本当はつらいのに、ピリピ教会の人たちに心配をかけまいとして、表向きは元気に振る舞っているようなのです。考えすぎだと言うのでしょうか。実は22節を見る

とよくわかってきます。

2 私の働きが豊かな実を結ぶ

1) 「私の働き」

22節を読みます。「しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。」

「私の働きが豊かな実を結ぶ」とあります。普通、自分からこんなことを言うのでしょうか。パウロは他の箇所で、謙遜でありなさいと言っているのです。確かにパウロはすばらしい働きをしたかもしれない。でも、そんなことは自分で言うことではない。ちょっと自信過剰ではないか。

もちろん自慢しているはずはありません。ではどういうことか。パウロの働きとは、いったい何のことなのか。そこがポイントです。パウロはこのとき何か華々しい働きをしたのでしょうか。いいえ。彼は投獄されているのです。ほとんど何もできません。エルサレムからあちらこちらを引き回され、船に乗せられ、そしてその船も嵐にあつて遭難し、島に流されました。しばらく島で避難生活を送り、やつのことでローマに囚人として送られてきました。そんなパウロが「自分の働き」と言うとき何を指すのか。実は12節で言っていました。「私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。」言い換えれば、彼が囚人の身分になったことで福音が前進した。自分が囚人という不自由で苦しい姿になった結果、豊かな実を結んでいるのです。

自慢話をしていたのではありません。自分が囚人になったことを、「私の働き」と皮肉

を込めているのです。それだけではありません。ある人たちはパウロにねたみ、中傷し、厳しいことばを投げつけさえしました。それも「私の働き」と言っているのです。

「私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。」この「どちらか」とは、21節の「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です」を指します。ある学者たちは、このあたりの文章は正式な文法からかなりかけ離れた乱れた書き方になっていると指摘しています。心が揺れ動いているからそのような書き方になります。「心配しないでください」と言うのですが、やっぱり心の中は苦しんでいるのです。

2) 生きること、死ぬこと

パウロは正直な人なのでしょう。本音を隠すことはできません。投獄され何年にもわたって自由を奪われていることだけでも、大きな苦しみです。それに加えて同じクリスチャンの仲間からも攻撃され、ねたまれていきました。いままで私は、パウロは非常に心が強く、どんな試練があってもくじけることなく立ち向かう人。決して弱みを見せない人。そう思っていました。しかし、どうもそうではない。パウロも私たちと同じ弱い人だったと身近に感じられるようになりました。

21節の「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」言い換えれば、今の状態は死んだ方がまだましだということです。それだけ苦しいのです。生きるか死ぬか、「二つのもの間に板ばさみとなっている」と言わなければならないほど、死ぬことを考えています。

3 私の苦しみをとおして主が栄光を現してくださる

皆さんのなかには、あるとき死にたいと思ったことがある方もいるでしょう。つい最近そんなことを考えた方もいるかもしれませんが。私もかつて仕事上のことで苦しいがあったとき、電車で飛び込みたいとか、柱に縄をかけて首をつりたいと思ったことがあります。キリストを信じていても、苦しみが続いてきます。救われて本当のいのちをいただいていますと言われても、あるとき、ただ死にたいとしか思えないときがあります。あのパウロでさえそういうときがありました。

そんなぎりぎりの中に追い込まれながら、パウロは20節でこう告白します。「すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。」

念のため確認しておきます。自分が生きようが死のうが、そんなことよりもキリストがあがめられることが大切だ。という意味ではありません。死にたいと思うほど苦しみに会ったとしても、私たちの苦しみをとおして主は栄光を現すことができる、と言いたいのです。

生きるか死ぬか、そんな瀬戸際に立たされたとき、私たちはひとりぼっちに感じます。だれも自分のそばに居ないと孤独感を味わいます。

しかし主も同じところを通られたのです。イエス・キリストは、いつも死と隣り合わせの人生を送られ、ついには十字架の苦しみを味わわれました。主の栄光はどのように現されたのでしょうか。主は、ご自分が苦しまれることによって栄光を現してくださったので

す。

試練に遭うとき、だれしももうだめだと絶望したくなります。もう解決はない。すべてが閉じられ、真っ暗闇にしか思えないときがあります。苦しみの中に良いものがあるなど到底思いもしません。かえって損と思えるものしか見えません。逃げ出したくなります。

しかし、主の栄光は私たちの苦しみをとおして現されていくというのです。どんな栄光なのでしょう。苦しんでいる本人にはわかりません。実感ありません。

でも、主は苦しみをとおして栄光を現してくださいましたのです。私たちは主が歩まれたところをたどっていきます。ならば私たちにも同じことが起きてもおかしくありません。

苦しむことは損だとこの世は言います。しかし私たちは違います。苦しむことは決して損とはならない。無駄ではない。主はどんな苦しみをも栄光に変えてくださいます。そのことを信じて歩んでまいります。